九州歯科大学第 73 回卒業式及び第 143 回大学院学位記授与式

式辞

　歯学科７３期、口腔保健学科１２期ならびに大学院修了生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。そして保護者ならびにご家族の皆様、本学に入学以来、成長を見守ってこられた皆様方のお歓びは一方ならぬものと拝察しております。教職員一同、心よりお慶び申し上げます。

　また本日、ここに、服部誠太郎福岡県知事ならびに香原勝司（こうはら　かつじ福岡県議会議長をはじめ、多くの来賓の方のご臨席を賜りましたことに対し厚く御礼を申し上げます。

　３月に入り、本格的な春の訪れを感じる季節となりました。そのような中、第 73 回卒業式と第 143 回大学院学位授与式を五年ぶりに、コロナ前と同様に全卒業生と全修了生、一人一人に学位記授与を壇上で行うこととなりました。本日は卒業生及び修了生の皆さんにと

って、記念すべき大切な一日であります。皆さんは、学生時代に新型コロナ感染症の影響を受け、普通のことが普通にできない状況で大変なご苦労をされてきたかと思います。先ほどの学位授与に際して、今まで、頑張ってきた学生生活を振り返って頂き、この日を無事迎えられたことに対して、皆さんを支えてくれた保護者様をはじめ関係者の皆様に対する感謝の気持ちと、学生生活を頑張ってこられた自分に対する誇りを胸に、学位記を受け取ってもらいたいと願っておりました。

本学は全国の 29 校ある歯学部、歯科大学の中で唯一の公立大学であります。今年の５月で１１１年という長い歴史と伝統、ならびに輝かしい実績を持っており、「口腔医学の総合大学」として、我が国の歯学教育及び歯科医療の発展に貢献して参りました。

本学が平成 27 年に定めた九州歯科大学憲章においては、「次なる世紀に向けて患者中心の歯科医療を提供できる人材の育成を第一義に掲げ、全人的歯科医学教育活動を展開します」と謳われており、本学では患者中心の全人的歯科医療を提供できる歯科医療人の養成を行っております。

卒業生ならびに修了生の多くは、今後、歯科医療人として地域保健医療の現場で研鑽を積まれていくことと思います。そこで重要になるのが、本学の卒業コンピテンシーの一つにもなっているプロフェッショナリズムの考え方です。米国のモンタナ大学のハーバード・スィック(Herbert M. Swick)による規範に基づく定義の中に「自己の利益よりも他人の利益を優先する」「倫理的・道徳的規範を遵守する」「説明責任を果たす」「卓越さを常に追求する」「学術活動と医学の進歩へコミットする」「自分の行為と決断を振り返り問題に取り組む姿勢」とあります。これらの定義は、皆さんが入学してから今に至るまで、一貫して涵養されてきた考え方で、医療人としての行動規範であります。学部卒業生の皆さんは、無事、歯科医師国家試験、もしくは歯科衛生士国家試験を合格して初めて、専門職医療人になります。患者さん、地域住民そして社会は、歯科医師もしくは歯科衛生士である皆さんの専門職医療人としての能力を計り知ることができない中で、全幅の信頼、期待を寄せて心身を委ねることとなり、結果的に仕事の独占、自律性、社会的地位などの様々な特権を与えられることになります。それに対して皆さんは、この特権の付与にプロフェショナルと

しての行動により責任を持って応答する義務が生じます。我々、医療人が歩む道は、生涯を通じて研鑽を積み、臨床能力の向上に努めていかなければなりません。コミュニケーションは必須の能力であり、倫理的・法的責務を遵守することはもちろん、その上に能力の卓越性、全人的な人間性、説明責任、そして利他主義を常に求められ続けることになります。皆さんにとって、プロフェッションとしての行動は簡単なことではありませんが、本日を境に、改めて歯科医療人として社会で生きていくことの覚悟を強く求めます。

　我々は近年、東日本大震災を含め多くの災害や、新型コロナウイルス感染症によるパンデミック、未だ世界各地で起こっている国際紛争による不安定な国際情勢などの、将来の先行きが見通せない、様々な不安定要因に曝されています。また少子高齢社会、人生１００年時代、AI をはじめとした科学技術の進歩、グローバル化などにより、我々を取り巻く社会環境は今まさしく大きく変わろうとしています。特に少子高齢社会における労働生産人口の減少は、我が国におけるあらゆる分野の労働者不足を引き起こしており、歯科医療分野においても同様です。すでに歯科医療に携わる専門医療職の人材不足は

起きつつあり、今後はその問題は益々顕著になっていくと考えられます。そのような社会情勢の中で、皆さんは歯科医療人そして社会人として、今後、生きていくということになります。ここで、安易に今日ここの学舎（まなびや）を巣立つ学生諸君に、明るい未来が待っているという言葉はかけません。明るい未来にするかどうか、これはひとえに、各々が「明るい未来、そして社会を作るんだ」という強い意志と行動力にかかっております。当然、ダイバシティが重要視される社会において、一人ひとりが思い描く明るい未来像は違っています。ただ共通しているのは、何もしなければ、何も起こらないだけでなく、もしかしたら益々、我々が住みにくい社会に変わってしまう可能性が大いにあることです。残念ながら、皆さんの人生も、光陰矢の如しで、あっという間に時間が過ぎ去っていきます。問題によっては、今からすぐ行動しなければいけないこともあるでしょう。たとえ失敗しても構いません、何もしないで、先々後悔するよりはよいはずです。このように我々は歯科医療人として社会全体の公衆衛生を担う役割だけではなく、一社会人として、社会全体を達観して、必要に応じて問題解決に関わっていくことが求められています。

ダーウィンの「種の起源」において「最も強い者が生き残るのではなく、最も賢い者が生き延びるでもない、唯一生き残るのは、変化できる者である。」という言葉がよく引用されますが、これは自分の形質を理解して、生きていくこと。そして、ここでいう変化は、進化における変化で、変化することが目的ではなく、自分の得意を伸ばしていくことで結果的に変化した環境で生き延びることができるということであります。急激に変化する社会の中で、それに順応していくために自分自身を変える必要も出てくるかと思いますが、まずは、そこで活かすことができるそれぞれの強みを見つけて、それを伸ばしていく中で、結果的に社会の変化に合わせるのではなくて、変化を自らが引き起こして未来に影響を及ぼす存在となることが重要です。そのような可能性はそれぞれが持っております。ある意味、世の中の変化は、自分で左右することもできるということを認識してください。これはアメリカの経済学者のピータードラッカーが「変化を脅威ではなく絶好の機会として捉えるべきである」と提唱している通りです。変化の先端に立って変化を生み出すことで、変化を乗り越えることができるということですが、これから先行き不透明で、社会も大きく変化していく時代において、変化を恐れず、ずっと私が皆さんに機

会があれば使っていた言葉である「主体的な行動」で乗り切ってほしいと願っております。

　大学院修了生の皆さんは、それぞれが各自の専門分野において深い知識とスキルを獲得されたことと思います。専門的な歯科医療を学びながら、研究活動を行っていくことは、非常に難しく、それぞれが大変なご努力をされたのではないかと推察します。一方で、皆さんが研究活動を通して得られた新しい知見はすでに、国際学術誌等を通じて世の中に周知されるものとなっています。研究者には、物事に対する好奇心から始まり、新しい学びを得て、探究を深めていくことを厭わない素養である行動力が必要です。研究活動において得られた成果は、創造的活動の一つであり、ある意味永遠に残る遺産で、大学院生活の誇れる勲章でもあります。

　一方、大学院における研究活動は、研究者としての序章でしかありません。それぞれの今後の進路は、様々であるかと思いますが、歯学分野を含めた医療分野の進歩には、専門的医療、研究活動による知見の集積は必須のもので、大学院修了生の皆さんには是非、大学院での

経験を通して修得された専門家としての能力、研究者としての能力を、社会に活かしていってほしいと願っております。また願わくは、我々と一緒に、大学人として、歯学教育、研究、専門臨床に興味を抱き、携わっていってくれる者が、一人でも多くいることを期待しております。

本学では、次年度から、まずは大学院教育の中に、起業家を養成するためのアントレプレナーシップ教育を導入していきます。教員だけでなく学部から大学院における学生の研究活動の成果も、起業に結びつけるよう学内の環境整備を行い、次年度から国立研究開発法人 科学技術振興機構の支援により、オール九州・沖縄圏一体でアジアとつながるスタートアップ・エコシステムを創出することを目指して立ち上げられた「Platform for All Regions of Kyushu & Okinawa for Startup-ecosystem」通称 PARKS に参画をすることとしています。実際に起業家になることは大変ではありますが、現状、歯科医師のほとんどは開業医になっている現状があります。本学におけるアントレプレナーシップ教育は、単に開業歯科医師になるためのものだけではなく、それがいずれ学部学生及び大学院生のキャリアパス

の多様化に繋がり、幅広く社会に貢献できる起業家を育成するきっかけにつなげていけることができればと考えています。

　最後になりますが、卒業する学生諸君にフランスの哲学者アラン、本名エミール＝オーギュスト・シャルティエの「幸福論」からの言葉を送ります。

　「人に幸福を与えるためには、自分自身が幸福でないといけない」当たり前の言葉のようですが、皆さんは、今後、様々な場面で、患者さんなど、自分の周りにいる多くの人に幸福を与えれる存在になってほしいと思っています。そのためには、まずは皆さんが、自ら幸福になることが必要です。同じアランの言葉で「人は幸福だから笑うんではなく、笑うから幸福なのだ」とあります。どうか笑顔を忘れずに、皆さん一人ひとりが幸せな人生を歩んでいただくことを祈念して、私の結びの言葉とさせていただきます。

　本日は、おめでとうございました。

令和７年３月１１日

九州歯科大学　学長　粟野 秀慈